

私たちの使命

前橋市立荒砥中学校 三年

齋藤 千咲

「Please buy this !」「No thank you」

このやり取りが何度も続いた。小さな少女が必死に商品売ってくるその表情が、私の脳裏に焼き付いて離れない。

中学一年の夏、家族旅行でセブ島に行った。楽しみに海へ行くと、私の所へ幼い少女達がやってきた。アクセサリーを売りにきたのだ。何度断っても離れない。皆、一つでも買ってほしくて必死な表情だ。ガイドさんが来て、やつとのことでの場を離れることができた。「あんな幼い子がどうして。大人は何をしているの」と思ったが、その理由はすぐに分かった。

海からの帰り道、集落を通った。家の造りはボロボロで床は雨水で濡れている。生活するにはあまりに悲惨で不衛生だ。この環境で生き抜くには家族全員が働かなくてはいけないのだろう。「貧困」が世代を超えて人々を苦しめている現実を目の当たりにして、私はショックを受けてしまった。

毎日学校で勉強をする。好きなテニスに熱中する。家でのおんびり家族と過ごす。私にとっての「当たり前」は、決して「当たり前」ではなかった。私はとても恵まれていて、幸せだと痛感した。と同時に、「私は恵まれていてからよかった」で終わらせていいのかと疑問に思った。私はたまたま日本に生まれ、好きなことに打ち込める環境に生きている。あの少女たちも、たまたまあの環境に生まれたのだ。もしかしたら、逆だったかもしれない。あの「少女たち」は、「私」だったかもしれないのだ。そう考えると、とても他人事とは思えなくなった。

生活のために子どもが働かされ、教育も受けられず、強制的に長時間労働を強いられる。それを“児童労働”というらしい。世界では一億六千万人の子どもが過酷な状況で働かされているそうだ。世界の子どもも十人に一人の計算になる。どこか遠い国の話のように感じるが、調べてみると、私達も無関係ではなかった。チョコレートやコーヒー、紅茶、Tシャツなど、低コストで生産するために、安い労働力として子どもが使われることがあるそう。うだ。いま手にしているものが、着ているものが、どこかの国の幼い子どもたちによって作られたものかもしれない。そう思うと、私は今まで通りの生活が続けていてはいけないうと強く思うようになった。

そこで中学生の私にもできることを考えた。そして二つのことにたどり着いた。一つは、児童労働という言葉を広め、正しく理解してもらうことだ。私はセブ島に行くまで児童労働という言葉聞いたこともなかった。知ったから見えた世界、

知ったから考えたことがある。多くの人が児童労働やその背景となる貧困問題について知ることが、解決への糸口になると信じた。

二つ目は、フェアトレードマークが付いている商品を購入することだ。フェアトレード商品とは、労働者の人権を守り、正当な価格で取引できる保証がされている商品だ。コンビニやスーパーなどでも売っている。このマークが付いている商品を選んで買うことで、児童労働をなくす力になる。

児童労働は決して許されない。「私でなくてよかった」ではなく、当事者意識を持って自ら行動したい。どこに生まれても、自分の人生を自分で選択できる世界を創るために、皆さんも一緒に考えていきませんか。なぜならそれが、これから大人になっていく私の、私たちの、使命と責任だと思うから。